

## 上海フランス租界と関西日仏学館

—— 第七代館長グロボワ（Charles Grosbois）を中心に

趙 怡\*

### はじめに

関西日仏学館（Institut franco-japonais du Kansai）は、フランスの詩人大使ポール・クロードル（Paul Claudel, 1868-1955）の尽力によって、1927年京都の九条山に設立された。1936年、大阪商工会議所会頭で貴族院議員だった稲畑勝太郎（1862-1949）の助力もあり、京都市内に移転された（現在のアンスティチュ・フランセ関西）。藤田嗣治画伯（1886-1968）も移転祝いに大型油絵を描いて送った（現在入り口正面の壁に掛かっている）。同じくクロードルの尽力によって1924年に設立された東京日仏会館（Maison franco-japonaise de Tokio）と共に、それぞれ関東と関西の日仏文化交流の中心地となった。ところで、これらの施設は早い時期から上海に注目され、現地のフランス語新聞 *Le Journal de Shanghai*（1927-1945、中国語の題名は『法文上海日報』、「法」はフランスの略称）に紹介されている。現時点で確認できたのは、九条山に設立された関西日仏学館を紹介する記事（1929年11月3日、p.10）、学館移転を報じる記事（1936年6月14日、p.5, p.10, p.11, p.13）、前年12月9日に新しい学館で行われた記念行事を報じる記事（1937年1月10日、p.6）などである。また同じ頃、東京日仏会館についての特集記事も見られる（1937年1月17日、p.5, p.10）。いずれも建物と主要人物の写真付きの長い記事であり、とりわけ吉田移転の特集は、学館創設と変遷から、建物の様子、重要人物のスピーチを含む開館セレモニーの詳細、寄贈品のリストに至るまで、多くの写真を加えて紙面4頁にわたり詳しく報告している（図1）。その内容は学館の報告書を根拠にしたと思われるが<sup>1)</sup>、それがタイムリーに海を渡って詳細に上海に伝わった事実は興味深い。両者を繋げたのは、ほかならぬ上海のフランス租界の存在であった。このような背景を考えると、30年以上も租界の教育文化界を牽引したシャ

---

\* チョウ イ 関西学院大学経済学部教授



図1 関西日仏学館を紹介する記事の一部 (Le Journal de Shanghai, 1936.6.14, p.5, p.10)

ルル・グロボワ (Charles Grosbois, 1893-1972, 中国名は「高博愛」) が、戦後日本に渡り、関西日仏学館館長を務めたことも、決して偶然ではない出来事だったと思われる。

フランス中部のシエール (Cher) 省ブルージュ (Bourges) 市にある教師の家庭に生まれたグロボワは、ソルボンヌで古典文学を学び、場所は不明だが、音楽を学んだ経歴もある。1914年、大学を卒業してすぐに第一次世界大戦に参戦し、2年後に重傷を負い、右手を失ってしまったが、負傷した部下を戦火から救出した勇敢な行為によって受勲。復員後はしばらくパリの学校で教え、1918年頃上海に渡り、フランス租界公董局所属の学校 (Ecole municipale française) に勤務し、1920年より1935年まで校長を務める。同校にはアリアンス・フランセーズ (Alliance Française) も設置されており、校長が中国代表 (Délégué) を兼務することになる。また1933年より1943年にフランス租界が「返還」されるまで、グロボワは公董局教育処処長 (Inspecteur de l'Enseignement) も務め、長年フランス租界の教育界に君臨したのである。戦後は1946年からフランス大使館の文化参事官 (Chargé de mission culturelle) となり、1951年前後上海を離れてからは短期間ユネスコに勤務し、朝鮮半島も訪問した。1953年日本に渡り、1959年帰国するまで関西日仏学館館長を務めた。その後の活動はまだ不明だが、1972年死去<sup>2)</sup>。

25歳の若さで上海に渡り、日本での6年間を加えると、人生の40年あまりを極東の地で過

ごしたグロボワは、到着早々フランス側の代表として中国のフランス留学運動に積極的に参与した。1933年には「中法聯誼会」（Association Amicale Sino-Française, 「聯誼」は親睦の意）を創設し、さらに既存のフランス語新聞とラジオ局もアリアンス・フランセーズの傘下に収め、さらなる文化交流のプラットフォームを作り上げた。戦後日本に来てからも、戦争により荒廃していた京都と関西のフランス語教育の復興と、日仏の文化交流に尽力した。しかし今となっては上海史研究の専門家さえ、その名を知る者は殆どいない。

本論では長らく歴史に埋もれたこれらの事実を明らかにし、日・中・仏の文化交流に生涯を捧げた、「高博愛」の名を持つこのフランス人の貢献について検証したい。

## 1 「東洋のパリ」：国際都市上海とフランス租界

### 1) 租界の設立と発展

上海はアヘン戦争により開港され、1845年、イギリス初代領事と上海道台が第一次「土地章程」を締結し、黄浦江のほとりに約0.56平方キロの土地を、イギリス人の居留地として永久に租借することを定めた。「租界」(settlement)の誕生だった。1848年、1849年にアメリカとフランスもそれぞれイギリス租界の北側と南側に租界を設置した。そして「第二次土地章程」(1854年)と「第三次土地章程」(1869年)の公布によって、中国人の移住が認められ、「華洋分居」から「華洋雑居」となった一方、「巡捕」(警察)の設置、英米仏の三国領事による「租主」会議の招集、および「工部局」(市政管理の組織)の設置も決められ、「租界」の管理が清朝政府の管轄下から離脱した。また1862年、フランス租界は統一行政から離脱して独自の行政組織「公董局」を設置し、フランス一国の専管租界となった。対して英米両租界は翌年に合併して共同租界(中国語では「公共租界」)になった。

20世紀初頭に至るまで、租界では埠頭、道路、ガス、電気、水道などのライフラインの整備が進み、多くの工場や商社が建設された。同時に租界当局は清王朝の弱体化を利用して、土地の拡張を重ねた。特に1893年と1899年の共同租界の拡張、および1900年と1914年のフランス租界の拡張によって、租界の面積はもとの数倍にも広がり、上海旧城の面積をはるかに越えた。人口も1910年の時点で共同租界とフランス租界を合わせて130万人近くになり、上海旧城に住む人口のほぼ倍になった。そのうち外国人の人口は15000人ほどしかおらず、圧倒的に多数を占めたのは、上海と近辺地域から移り住んだ中国人だった。また都市建設と工業化が急速に進められると同時に、長らく禁じられていた宣教活動も開港都市を中心に認められ、英米が中心としたプロテスタントとフランスが中心としたカトリックの教会勢力は、多くの教会と学校、病院、孤児院を建設し、印刷所と出版社も次々と設置されるようになった。そもそも中国は明末からのイエズス会宣教活動の影響が大きく、フランス租界の南西に隣接する徐家匯

一帯には、宣教師のマテオ・リッチ（1552-1610）に感化され、洗礼を受けた著名な政治家・思想家徐光啓（1562-1633）の別荘と農園があった。その末裔から広大な土地を譲り受けたイエズス会の江南教区は、ここに上海初のカトリック教会とともに、修道院、神学院、幾つものミッションスクール、そして工芸技術を教える「土山湾孤児院」などの施設を開設した。さらに欧米の水準にも遜色のない大学、病院、図書館、博物館、天文台などの文化施設も次々と設置した<sup>3)</sup>。

一方、西洋からの衝撃に直面した清王朝は、第二次アヘン戦争と太平天国の乱から教訓を受け、ようやく西洋の近代技術を取り入れることに重点を置く一連の改革、いわゆる「洋務運動」を開始した。上海にも1865年江南製造局が設立され、兵器と軍艦製造のほか、語学学校や翻訳館も付設された。数十名にのぼる西洋人宣教師が雇われ、中国の文化人の協力のもとで西洋の軍事科学、地理、経済、政治、歴史等の書籍を翻訳出版し、その多くは日本にも伝わった。これらの事業を通して言語と科学技術方面の人材も多く育成され、海外への留学生も多数派遣されるようになった。しかしこれらの改革は結局清王朝の運命を好転させることができず、上海の外国人居留民もやがて清王朝の転覆を目の当たりにした。新しい政府は、紆余曲折を経ながらも、近代化への道を進み、こと思想教育においてはより「西方文明」を取り入れようという姿勢を打ち出したのである。

## 2) フランス留学運動と中仏教育合作事業

辛亥革命によって新生した民国政府は、国家建設において欧米と日本をモデルにしようとしたが、思想と文化の面においてはとりわけ「自由、平等、博愛」を唱えるフランスの思想理念に共感した者が多かった。民国元年（1912）に、留仏経験のある呉稚暉、李石曾、汪兆銘、褚民誼らが早速北京で「留法儉学会」、1915年にパリで「華法教育会」をそれぞれ設立し、フランス留学運動を推し進めた。それが第一次世界大戦の勃発によって一旦中断されたものの、戦争によって労働力が不足した英仏への華人労働者の派遣につながった。そして戦後仕事を失った華人労働者を救済する目的で始まった「勤工儉学」（働きながら勉強する）は、フランス政府の支持も得て全国的なフランス留学運動に転じた。1919年からわずか1年あまりの間に全国各地から約1600名の学生が20回に分け、上海経由でフランスへ赴いた。留学生の中にはのちに中国共産党の指導者になる陳毅（中華人民共和国初代上海市長、後に外交部長）、鄧小平、周恩来らもいた。

ほとんど知られていないことだが、当時留学を斡旋する上海「華法教育会」のフランス側の代表を務めたのは、ほかならぬ上海に到着して間もないグロボワだった。彼がどのような経緯でこのポストについたかは不明だが、少なくとも1918年3月から、彼が「フランス租界公立学校校長」として上海華法教育会の評議員になり<sup>4)</sup>、そして翌年の9月には中国人の代表洪誠による会費横領事件をきっかけに、洪に代わって華法教育会の代表として具体的な事務を担当

することになったことが分かっている<sup>5)</sup>。この時期の『申報』や『時報』などの新聞に、フランス留学に関する記事が多く掲載されているが、グロボワも「高博愛」として度々登場した。留学生たちのパスポートの発行や船の切符の手配などに助力しただけでなく、フランス教育界の代表として数々の送別会に出席し、旅立つ留学生たちに情熱あふれるスピーチを贈った<sup>6)</sup>。のちに「勤工儉学」運動に参加した者は共産党側、「華法教育会」に関わった者が国民党側へ流れる現象が見られるが、国共両党が合作と分裂を繰り返していく歴史のなか、両方の上層部とパイプを持つことは、グロボワの人生に大きな影響を与えただろう。

ところで多くの中国人がフランス語の知識と学力が不足したまま渡仏したことは、様々な問題も引き起こし、「勤工儉学」運動は1920年以降下火になった。それと前後して中仏両国政府の主導により正規留学と教育合作事業が展開されるようになり、その成果として、1919年に「里昂中法大学」(Institut Franco-Chinois de Lyon)、1920年に「北京中法大学」(Université Franco-Chinoise de Pékin)と「巴黎中国学院」(Institut des Hautes Études Chinoises de Paris, IHEC)がそれぞれ創設された。1921年には上海の「中法工商学院」(Institut Franco-Chinois d'Industrie et de Commerce)の改編も行われた。一連の合作事業の主役として活躍したのは、民国政府の初代教育総長、北京大学の総長でもあった蔡元培(1868-1940)のほか、かつて蔡と一緒にフランス留学運動を推し進めていた李石曾、汪兆銘、呉稚暉、褚民誼などだった。

一方、フランス側の功労者は蔡の親友で、1917年と1925年に二度フランス首相に就任したポール・パンルヴェ(Paul Painlevé, 1863-1933)、著名な東洋学者で敦煌文献をフランスにもたらしたポール・ペリオ(Paul Pelliot, 1878-1945、中国名は「伯希和」)などであった。パリやリヨンの政治家や教育家も名を連ねている。注目すべきことに、これらの教育機構を運営する理事会は、会長とメンバー構成がいずれも中仏両国同人数によって構成されており、具体的な管理においては「里昂中法大学」はフランス側、「北京中法大学」においては中国側がそれぞれリーダーシップをとっていたとはいえ、基本的には対等な合作関係が保たれている。蔡元培は自ら「北京中法大学」の学長も兼任した(1920-1930)<sup>7)</sup>。

これらの事業に、グロボワがどれほど貢献したかはまだはっきりしていないが、少なくとも「上海中法工学院」の改編には関与したと思われる。10年後の1931年7月に、グロボワは中国の総代表として、パリで行われたアリアンス・フランセーズの総会に出席し、「中国におけるフランス語とアリアンス・フランセーズの役割について」(La Langue française en Chine et le Rôle de l'Alliance française)と題する、28ページに及ぶ報告(以下「グロボワ中国報告」と略す)を発表したが、そのなかでまず中国におけるフランス語教育の歴史を回顧し、「上海中法工学院」を含む教育機構の改編や設置におけるアリアンス・フランセーズの貢献に言及した。また「華法教育会」を設立した李煜瀛(李石曾の別名)と褚民誼らの貢献を高く評価し、李を「フランスの最も偉大な友の一人」と讃えている<sup>8)</sup>。

一方、19世紀後半から戦前までの中国におけるフランス語の教育について、先行研究がまだ十分でないため、各地の有名大学と中等学校でフランス語を学ぶ学生の人数を具体的に挙げて分析するグロボワの報告は大変重要な情報源である。それによると、かつて四川や雲南の庶民階級までに及んだ一時のフランス語の人気の凋落している一方、ここ20年来、こと中国のエリート層においてフランス語熱はむしろ著しく高まっているという。北方のハルビンから、北京、天津、南京、上海、広東、そして内陸の四川に至るまで、大学でフランス語教育を受けた者が数千人、もしくは万単位に上っている。なかでも「北京中法大学」、「上海中法工学院」、そしてカトリック教会の大学として発展してきた震旦大学 (Université Aurore) は共にトップクラスのフランス語教育を実施していると、グロボワは熱を込めて詳細に紹介している。

そもそも1903年上海のイエズス会によって創設された震旦大学は、医学部と法学部、理工学部を有し、全教科がフランス語で講じられており、学生が直接フランスの大学に編入できるほど、極東一のフランス系大学であった。その近くにある、国語を除く全教科を英語で教える聖ジョンズ大学 (Saint John's University, 1879年語学学校として創立、1905年大学に昇格) と共に、アジアでも有数の名門大学として世界に名を轟かせたのである。20世紀初頭は、また清末に設立された教育機構の改編と昇格、そして大学新設のラッシュが起きた時期でもあった。国立の名門である北京大学、清華大学、上海の交通大学、南京の中央大学、広州の中山大学などと共に、多くのミッション系の大学や私立大学も群立した。その中には北京の燕京大学 (Yenching University) と輔仁大学 (Fu Jen Catholic University)、山東済南市の齊魯大学 (Cheeloo University)、上海の聖ジョンズ大学と震旦大学、南京の金陵大学 (University of Nanking)、蘇州の東呉大学 (Soochow University)、杭州の之江大学 (Hangchow University) などがあり、ミッション系の名門校として発展した。女子教育も大都市を中心に展開され、北京大学は1920年より女子学生の入学を許可し、1920年代以降は大多数の大学が男女共学を実施している。これらの大学はのちに帝国主義による文化侵略の象徴として、1952年に行われた全国範囲の大学改編によって一斉に撤廃されたが、新たに設置された主要大学の骨組みとしてそれぞれの大学の発展に大きく貢献し、近年では文化遺産として過去を偲ばせる存在となっている。

なお上海には大学レベルだけでなく、中等教育、さらには小学校や幼稚園レベルでもミッション系スクールが多く、公立の小中学校でも英語とフランス語教育が盛んだった。

### 3) 戦間期の繁栄と文化芸術の発展

こうして上海は一地方都市から、アジア一の国際的な大都会に変貌した。中国の統治が及ばない半植民地的な性質を帯びながら、世界各国の人と文化が自由に流れ込み、近代工業が誕生しかつ大きく発展すると同時に、新聞出版、映画、演劇、音楽などの文化産業も一斉に産声をあげた。第一次世界大戦や国内の動乱を経て、上海は1927年、民国政府の特別市となり、翌

年首都の南京移転によって地の利も高まり、以降の10年間は発展の黄金期を迎え、繁栄を極めた。世界各国からの投資を受けて様々なスタイルの高層ビルが立ち並び、西洋式の教会、学校、病院、劇場、映画館、ダンスホール、そして住居が改築または新築され、あたかもヨーロッパの街並みの一角をそのまま再現したかのような地域が多数現れた。一方、雄大なビルが林立するバンドと幾つもの大型百貨店が対峙する南京路を有する共同租界や、蘇州河に跨がるガーデンブリッジの北にある、長崎を彷彿させる虹口の日本人居留民街と比べて、フランス租界は文化の街として発展した。都市建設が厳しい管理のもとで進められ、綺麗に舗装された道路が美しい街路樹に彩られ、両側に庭付きの高級洋館が立ち並び、西洋式の劇場や映画館も点在する。フランス租界の存在こそ、上海が「東洋のパリ」の異名を持つ所以でもあった。

もっともフランス一国の専管で、駐上海総領事が「公董局」の長を兼務しているフランス租界は、イギリス人主導で各国の居留民が管理に参加した共同租界よりも、祖国との繋がりが緊密だった。しかしフランス植民地のインドシナが存在が関係したか、上海に来るフランス人の数は一向に伸びなかった。第一次世界大戦終結後、外国人の人口が急激に増え、英米居留民（1万あまり）や白系ロシア人（2万）、そして日本人（2万）の数に比べて、フランス人の居留民数が終始3000人未満に止まった。この数の劣勢が、フランス租界の運営に大きな影響を与えた。すなわちこれが、経済的な利益を求めて高圧的な植民地政策をとっていた共同租界とは異なる、街の建設や文化教育に力を入れるよりソフトな政策を取らせた一因だった。その背後にはフランス文化のソフトパワーを重視するフランス政府の対外政策が働いた一方、長年にわたるイエズス会による布教活動の影響や、フランス留学運動と一連の教育合作事業も下地になったと考えられる。そしてこの政策は1930年代に入ると一層開花する。かつてフランス留学運動に関わった者が国民政府の高官になり、フランスで学位を取った人々の帰国先もほぼ上海だった。街並みだけでなく、文学、美術、映画、演劇、音楽、ファッションに至るまで、上海は世界、特にパリの新しい潮流を吸収し、発展した。すなわち租界という半植民地の性質によって、上海は当時の日本よりもはるかに西洋の「本場」に近い環境に置かれていた。それに対して、中国の知識人は激しい反発を示しながらも、西洋文化に対する強い憧憬を抱えている。洋館に住み、洋装を身に纏い、週末はコンサートやダンスパーティーに赴き、流暢な外国語で会話を交わす場面は、当時の文芸作品の中にも多数見られる。北京や上海では数多くの英語とフランス語の雑誌、新聞が刊行されており、執筆者には中国の文化人も少なくなかった。またフランス留学の経験者のみならず、新文化運動の旗手である魯迅、周作人、胡適などのような、西洋列強の餌食になっている祖国を変えるには、西洋文明を最大限取り入れることが不可欠だと考えている知識人が極めて多かった。

中国の文化人のこうした両面性について、グロボワは十分に認識している。小特集の付録として掲載された藤野志織氏によるグロボワ報告の抄訳からも、その中国認識を垣間見ることが

できる。彼は20年来、フランス語の普及において、「庶民階級における必然的かつ現実に回復しようのない凋落と、中国のエリート階級における著しい発展」が見られることを紹介しながら、「租界廃止」や「国家主権」を主張する「外国人嫌いの気質」がロシア人の手によって呼び起こされている現象を批判している。中国の学生たちについては、純粋な学問や哲学的な思索よりも実益を追求し、「面子」を重んじるあまり、不得意な科学知識の学習を拒む体質を鋭く指摘している。しかし同時に「神経質で攻撃的、反抗的である反面、感じやすく、いかかわしい政治思想の宣伝機関に煽られて縦横無尽に飛び回る」若者を動かしたのは、「自分たちの国のために何か学び、何かしたいという意味、もしくは願望」(13頁)だったことも、グロボワは確実に受け取ったのである。

若者の特徴を掴んだグロボワは、中国の厳しい現実と地域や階層による多様性も的確に把握している。またヨーロッパの人間には想像もできないほど恐ろしい自然災害と、度重なる内乱や戦争のために苦しみ、「枯れ果てている」にも関わらず、「平和を愛し、器用であり、逆境のなかにあっても驚くべき柔軟性を発揮」し、「そして並外れた商才によって常に生き生きとしている」「中国の人民」像を描いている(10頁)。そのような認識は、むろん李石曾や蔡元培らの思想家との深い友情及び相互理解に負うところが大きかったが、彼自身が精力的に中国の各地へ赴き、中国の現実を観察し、かつ現地の人々と接した体験からも生み出されたのだろう。さらに彼自身も回顧したように、第一次大戦の戦場で出会った、片言のフランス語を話すことを誇りとしている陽気な中国人の労働者からも感銘を受けたかもしれない。結果として「我々の役目は評価を下すことではなく、理解すること」(11頁)であり、どんな困難に直面しても「大きな友愛」を抱いて中国に接することを、グロボワは唱えている。そしてそれを実現しようと努力を惜しまなかった。「高博愛」の名は、グロボワの秘書で友人の沈仲俊(1886-1972)が付けたが、そこには双方の思いが込められた。時に中国語新聞の記事の中に、大勢の中国人の名になんの違和感もなく混じっている「高博愛」の三文字を見つけたことがあるが、このことは彼がいかに現地に溶け込んでいたかを物語っている。

## 2 グロボワとフランス租界の中仏文化交流

### 1) アリアンス・フランセーズの中国代表として

「勤工儉学」運動が下火になってからは、グロボワはアリアンス・フランセーズを中仏文化交流の場として発展させた。その上海支部が1912年、シャルル・メボン(Charles B. Maybon, 1872-1926)により、公董局管轄の学校、つまり後のグロボワの勤務先に設立されたが、当時はそれほど目ぼしい活動はなかった。1920年に校長となったグロボワは、数々の改革を実施し、本来居留民の子弟校に過ぎなかった学校の教育内容と水準を、短期間にフランス本土の教育シ



システムにリンクできるように向上させた。またフランス人居留民の子弟のみならず、白系ロシア人や中国人を含む他国の生徒の入学も許可し、英語教育にも力を入れた。1936年の時点で、全校生徒430名（男子190名、女子240名）のうち、フランス人が169名のみであり、対して白系ロシア人が136名、中国人が39名、そしてイギリス人が11名など、計26カ国もの異なる国籍からの学生が集まる、インターナショナル・スクールとなった<sup>9)</sup>。敏腕な教育家として、グロボワが手がけた中仏の教育機構は数十校に上り、上海の人々の間で絶大な人気を得たのである。

1883年に設立されたアリアンス・フランセーズは、もとはフランス政府の植民地支配を扶助する機構であり、フランスの言語と文化の普及を推し進める背後に、「文化の植民支配」の意図も見え隠れしている。しかしグロボワは終始東西文化の相互交流を唱え、上海に渡った当初からそれを実現しようと努めた。留学運動が下火になり、フランス語の学習者が急激に減少してからも、彼は学校にフランス語の教室を開設し、中仏の文化人が交流できる組織の成立も模索した。1922年4月9日の『申報』には5月1日より、フランス学校にフランス語を教えるクラスが開設される広告が載せられ、授業が週3回、午後6時より7時まで行われ、月謝10元、女子も参加可能と書かれている。

1926年、環龍路（la route Vallon, 現南昌路）にあったフランス・クラブが現茂名南路に建設



図2 『法文上海日報』に紹介されたグロボワと学校（Le Journal de Shanghai, 1928.7.14, p.20）

された新しい会所（現花園飯店の跡地）に移り、その空いた建物にグロボワの学校が移転した（翌年に Collège municipal français に昇格、中国語では「法国公学」または「法国学堂」と呼ばれる）。フランス公園に面している横長の雄大な校舎（現科学会堂）は、600人を収容できる講堂と大小の会議室を有している（図2）。同じく構内に移ったアリアンス・フランセーズは、グロボワのリーダーシップのもとで、近くにあるフランス・クラブと公董局のホールと共に、フランス居留民の主な社交場となっただけでなく、中仏の文化交流の場としても提供されるようになった。1929年3月9日『申報』は「法文協会之文化事業」という見出しのもとに、当時の様子を以下のように描いている。

上海アリアンス・フランセーズは、パリにある本部の支部であり、1912年7月に中法国立工業専門学校校長梅雲鵬により設立される。会所は霞飛路247号にあり、その後環龍路11号に移り、フランス公園に面している。図書館に所蔵されている書籍はすでに18000冊あまりに上っている。文学、芸術、音楽、科学に関する各種の講演が常に行われ、計数十回にも数えられる。またフランス語の夜間授業も6クラスがあり、中国人と西洋人居留民の受講者が百数十人いる。すでに卒業証書を得たものも50人弱いた。高博愛が協会の理事であり、駐上海フランス総領事が名誉理事長、国民政府中央委員李石曾、褚民誼がそれぞれ理事を務めている。3月9日午後7時に音楽舞踏会を開き、褚民誼も来場す。<sup>10)</sup>

なお2年後に発表された前述の「グロボワ中国報告」によると、図書館の蔵書は既に2万2千冊以上に増え、しかも会員だけでなく、無料と認められた多くの人々に対しても書籍を貸し出し、閲覧室や自習室はすべての人に開放している。また夜間クラスは外国人や裕福な中国人には有料だが、一般の中国人向けのクラスでは無料だった。報告書の冒頭に掲載されたアリアンス・フランセーズの組織を見ると、フランス総領事が名誉会長を兼任し、主要メンバーの中には李石曾、褚民誼、王景岐（元駐ベルギー公使）など、フランス留学運動の推進者で中国政府の有力者たちも入っている。300名あまりの会員には、フランス人およびフランス語ができる中国人や欧米人の医師、教授、商人、判事、弁護士、実業家、技師、カトリック宣教師など、いわゆる各界の「名士」が揃っている。運営は、彼らから徴収した会費に加え、公董局からも多くの補助金がついており、このような強力なサポートをもとに、「フランスの知的・芸術的領域およびフランスの動向のありとあらゆる努力を協会の周りに結集させ、フランス語教育に何らかのかたちで関っているすべての者を助け、励まし、後押しする」（20頁）というグロボワが挙げた目標も、かなり現実的になったであろう。

注目したいのは、グロボワは中国の文化人に、単なる「受講者」として様々な文化活動を開

放ただけでなく、彼らを主役としても登場させたことである。1929年4月に、中国教育部が主催する第一回全国美術展覧会が上海で開かれ、中国近代美術の誕生と発展において大きな出来事として注目を呼んだ。その翌月の24日に、林風眠（1900-1991）が率いる杭州国立芸術院の美術展覧会がグロボワの尽力により、アリアンス・フランセーズを会場に盛大に行われた。フランスのディジョンで美術を学び、1926年、フランス人の妻を連れて帰国した林風眠は、数え年27歳の若さで蔡元培の推薦を受けて中国芸術学校の頂点である北京国立芸術専門学校の校長に就任した。ディジョンで知り合った旧知のフランス人画家で美術の教授でもあるアンドレ・クロード（André Claudot, 1892-1982）を招き、フランス式の教育を実施し、2年間で多くの成果を得たものの、周囲の反発を招き、辞職に追い込まれた。しかし再び蔡元培の指示を受け、今度はクロードと共に南方の杭州に来て新たに国立芸術院（杭州または西湖国立芸術院とも呼ばれる）を創設し、その院長になった。フランスと深く関わっていたこの美術学校が、居留民の関心と呼んだのも自然であろう。展覧会開幕の日に、林風眠が盛大な晩餐会を主催し、駐上海フランス総領事を始めとする中仏の要人達と大勢の来賓が出席した。「現代芸術の母である」フランスからの影響を認め、フランスの友人たちの助力によって画展が開催できたことに感謝する林風眠のスピーチに対して、グロボワは以下のような答辞を述べている。

一つの考えだけを付け加えましょう。かつて我々は中国の芸術から影響を受けました。今度はあなた方が我々のものを受け継ぐ番です。この二つの芸術のコラボレーションがきっと新しい完成品を生み出すでしょう。私から見れば、今日の成果がまさに中国の伝統芸術と我々の芸術を融合して創出された中国の新しい芸術のスタートであります。そしてここからすぐに、我々はより輝かしい完成品を見ることができると確信しております。<sup>11)</sup>

展覧会はフランス語新聞により大々的に報じられた影響もあり、大成功を収めた。それ以降も、林風眠と中国人画家の画展は度々アリアンス・フランセーズにて行われており、その都度多くの作品写真とともにフランス語新聞に取り上げられている。作品の一部はホールにも飾られている。こうして常に「二つの芸術のコラボレーション」を重視するグロボワの姿勢が、中国人の友情を得た最大なる理由だったに違いない。彼は中国人の集まりにも積極的に参加し、また各地に回ってアリアンス・フランセーズの支部の設立に努めた。一方、「在中フランス人の数の顕著な増加は見込めないため、（中略）望みを託すべきはフランスからの帰国者による」「強力な組織」であることも認識していた（「グロボワ中国報告」、25頁）。アリアンス・フランセーズの自習室にはフランス、スイス、ベルギーからの帰国学生の会の恒久的な事務所が設置され、1930年12月には褚民誼が会長となる南京「中法友誼会」も設立された。そして1933

年、ついに上海「中法聯誼会」がグロボワの努力のもとで誕生したのである。

## 2) 「中法聯誼会」の設立

準備活動は7月から始まり、フランス公使、上海総領事、民国政府行政院長汪兆銘、鉄道部長曾仲鳴らが賛同し、褚民誼、陳公博が会員となり、会員数は200人に上った。グロボワは自ら組織の目的、入会条件、活動内容を規定する詳細な規程を作りあげ、とりわけ中仏文化の相互交流を重視し、会長と副会長職を中仏の文化人が順番で担当することを決めた。12月3日、アリアンス・フランセーズの大講堂にて創設大会が行われ、中仏両国の政府要人と文化人が100名あまり出席し、汪兆銘と曾仲鳴からの祝賀電報も届いた。中国人とフランス人それぞれ8名ずつの理事が選出され、また12月5日に行われた第1回理事会により、王景岐が会長、グロボワが副会長に指名された（次年度はグロボワが会長を務める）。またグロボワの提案によって、フランス公使への送別会も兼ねて、15日にフランス・クラブで盛大な「中法聯誼会」成立祝賀会が開かれた。200人を超えた参加者には、公使と駐上海総領事を含むフランス租界の首脳たちと共に、李石曾、蔡元培、褚民誼らの政府要人も名を連ねている。翌年の春、「中法聯誼会」はフランス領事館から資金援助を得て、近くのLafayette路577号にある庭付きの洋館を買い上げ、「中法聯誼会」専用の会所として1934年5月22日に開いた。開所記念パーティーにもフランス総領事や上海市市長を含む多くの要人が出席した。それと同時に「中法聯誼会」の会誌も刊行され、その創刊号からグロボワも度々寄稿している（図3）。

そもそもアリアンス・フランセーズと「中法聯誼会」会所が位置する周辺一帯は、フランス租界の中心地で高級住宅地であり、孫文夫婦、蔣介石夫婦を始め、各界の要人や文化人たちが好んでそこに居を構えるため、文化交流の相乗効果が生まれる。グロボワの人脈もあって、こ



図3 「中法聯誼会」会誌に掲載された会所の写真および中法聯誼会会所開館式典の様子  
(*Association amicale sino-française bulletin*, No. 3, 1933. 10.)

これらの組織は、公董局所轄の法国公学や震旦大学、上海中法工学院などとも連携し、さらに林風眠の西湖国立芸専（杭州国立芸術院の後身）、劉海粟の上海美専、蕭友梅の国立音専、徐仲年の文芸茶話会などの中国の文化機構とも活発に交流を行っている。中仏両国の要人と大勢の文化人を迎えて、数々の講演会、コンサート、演劇、美術展覧会または宴会や茶話会が頻繁に行われ、その詳細は常に『申報』や『法文上海日報』などのメディアで報じられ、上海文化界の注目を集めている。多種多様な文化ネットワークを通して行われた東西文化の交流と融合は、文学、美術、演劇、映画、音楽などの各領域を通して、上海のモダニズム文化（「海派文化」）の誕生と発展に大きく寄与したのである。

ところで、租界の存在と宣教活動、およびアヘン戦争以降の翻訳館や語学教育機構の群立によって、北京や上海には数多くの外国語新聞や雑誌が存在している。グローボワもその中国報告のなかで図書館の整備のほかに、フランス語書店の運営や、中国のフランス系の新聞雑誌を取り上げ、メディアの重要性を説いている。そして報告の時点ではまだ「アリアンス・フランセーズの直接的な管轄では必ずしもない」『法文上海日報』とフランス語のラジオ放送局を、やがて傘下に置き、それを文化交流の場として変身させたのである。

### 3 文化交流の結節点としての上海

#### 1) フランス語のメディアを通して

『法文上海日報』（*Le Journal de Shanghai*）は、1927年12月にフランスの大手新聞社に勤めていたフランス人のジャーナリスト、フォンテノワ（Jean Fontenoy, 1899-1941, 中国名「黄徳楽」）により創刊された。創刊当初は左翼的な傾向が濃厚だったが、2年後フォンテノワが離職してからは、祖国フランスのニュースや上海にいるフランス人居留民の生活に関する報道が中心となった。前述した中国近代美術への関心は、むしろ例外的だったとも言える。しかし1932年を境に、新聞の文化欄の傾向が大きく変わり、美しい図版に世界各国の文化を紹介する長文を含む日曜特集（12頁前後）が登場し、本論冒頭で挙げた図1も、その一つである。それが功を奏したのか、部数は1929年の350部から1933年の2000部近くに増え、発行地域も上海だけでなく、北京、広州、日本、インドシナ、フランス本土と広範囲に及んでいる。なお1936年の時点でフランス居留民の人口は2500名程度しかおらず、ほとんどの家庭が新聞を購読していたと考えられる。

租界の外国語新聞と言えば、従来筆頭に挙げられたのは、*North China Herald*（『北華捷報』）や *North China Daily News*（『字林西報』）などの英字新聞であり、近年『大陸新報』などの日本語新聞も注目を集めつつある。発行部数が6000～8000部の英字新聞や、数万部に達した日本語新聞に比べて、『法文上海日報』は発行数が少なく、所蔵場所も限られ、かつ長年門外不

出だったため、これまでの上海史研究においてはほとんど看過されており、基礎的な情報すら不足している。筆者も2011年より租界の劇場文化に関する共同研究に参加したことをきっかけに、この新聞に関する調査を始め、また研究仲間と共に、フランス国立図書館(BnF)と交渉を重ねた結果、所蔵紙の全面デジタル化とホームページでの無料公開が実現された<sup>12)</sup>。

1927年から1945年まで、発行期間が18年にも及ぶこの日刊紙は、その前身 *L'Echo de Chine* (1897-1927) と合わせれば、フランス租界が最も発展を遂げた20世紀前半を完全にカバーしており、フランス租界をリアルタイムで報告している貴重な情報源である。毎日の記事はもちろんのこと、毎年7月14日のフランス建国記念日に組まれた、数十ページにも及ぶ大型特集だけを通して、租界発展の軌跡を垣間見ることができる。そして私たちが注目している新聞の特徴は、まずその文化欄の豊富さにある。大衆向けの映画、演劇、通俗小説だけでなく、ほかの新聞には数少ない芸術音楽、バレエ、美術、文学関係の記事、評論、翻訳また原作も多く掲載されているのである。創刊号に掲載されたロシア作家プーシキンの作品をはじめ、バルザック、モーパッサン、プルースト、魯迅、夏目漱石、芥川龍之介など世界各国の著名な文学者の作品が翻訳紹介されており、日中両国を含むアジア各国への重視の度合いも際立っている。執筆陣には、アジア文化を愛してやまないフランス人だけでなく、中国、日本を含むアジア各国の著名文化人も加わっており、グロボワ自身も主な執筆者の一人だった<sup>13)</sup>。

音楽学も専攻していただけに、グロボワは音楽の造詣も深かった。上海には「極東一」と評された工部局所属の交響楽団があり、音楽シーズン中ライシャム劇場(蘭心大戲院)を主な拠点に日曜コンサートを行っていた。フランス語新聞は楽団の音楽活動を常に詳しく報道しており、自ら楽団委員会の委員と新聞の理事も務めたグロボワは、1929年10月より「上海の音楽」(*La Musique à Shanghai*)と題する欄を設け、ほぼ毎週欠かさず評論を寄せた。コンサートを極めて専門的な見地から評するだけでなく、曲目や音楽家についても丁寧に解説し、西洋芸術音楽の啓蒙と伝播に尽力した。また日中両国の音楽にも関心と理解を示し、支持を惜しまなかった。さらにロシア居留民の音楽協会の理事も務め、ライシャム劇場などで活躍していた「上海バレエ・リュス」の創立と発展にも大きく貢献した<sup>14)</sup>。

租界には、『法文上海日報』のほか、フランス語のラジオ局「芸術と文化」(*Art et Culture*)もあった。1935年から上海に滞在し、その責任者を務めていたクロード・リヴィエール(*Claude Rivière*, 1882-1972, 本名 *Alice Beulin*) は、ポーランド首都ワルシャワの軍人家庭で生まれ、ソルボンヌでフランス文学を学び、教授資格を獲得した旅と冒険好きの女性である。一次大戦後にアメリカに渡り、記者と大学の教員を経てホノルルに移り、南太平洋の島々を遊歴しながら、世界各国の文化人とも交友した。1935年ハワイ舞踊団を率いて上海を訪問し、移住する。彼女はラジオ番組のパーソナリティを務め、また自宅を文化サロンにして、早くも租界の誰もが知っている華となった<sup>15)</sup>。目下大阪音楽大学井口淳子教授が主導して『法文上海日

報』に掲載された放送プログラムを精査しているが、番組の内容は、1935年、すなわちリヴィエールの着任を境に大きく変わったことが分かった。放送はニュースや情報番組、そしてフランス語と中国語の語学番組のほか、音楽も大きなウェイトを占めている。また番組の特色の一つはリヴィエールの談義（causerie）であり、世界各国の文化や芸術に関する紹介が主な内容であり、各国の文化人との対談も豊富だった。

リヴィエールはまた『法文上海日報』の主な執筆者であり、筆者の調査では、彼女によるアジアの芸術や歴史風俗を紹介した長文だけでも数十本に上っている。どれも美しい文筆で書かれ、文学、音楽、美術、映画演劇の各方面にわたる深い教養だけでなく、アジア文化をこよなく愛している情の深さも行間から溢れ出ている。実際文面からは、彼女が梅蘭芳や林風眠などの中国の著名文化人とも交友していることがわかる。ラジオ局だけでなく、新聞の文化欄も、明らかに彼女の参加によって一気に深みと広がりが増したのである。

リヴィエールについての詳しい紹介は別稿にするが、ここでまず強調したいのは、フランス語のラジオ局も、『法文上海日報』と共にアリアンス・フランセーズに所属であった点である。その背後には明らかにグロボワの努力があった。実際フランス外交史料館に残されていた、リヴィエールがグロボワ宛てに書いた手紙や、アリアンス・フランセーズに提出したラジオ局の年末報告書からも、二人の関係性と目標の一致が窺える。彼らはまさに上海の中仏文化交流に尽力した双璧だったといえよう。

## 2) 絡み合う仏・中・日三国間の文化交流

上海は異文化のつぼであり、数十カ国の外国人居留民がここに住み、世界各国からも絶えず文化人や芸術家やってくる。日本人にとってもビザなしで一昼夜の船旅で行ける海外都市であり、永井荷風を始め、谷崎潤一郎、芥川龍之介、佐藤春夫、金子光晴……戦前では日本の著名文化人の多くが一度は上海に来ていた。逆に上海に渡った西洋人にとっても、日本は自らの意思で近代化を進めた唯一のアジア国家として一度は見てみたい国であり、絶好の旅行先であり保養地でもあった。実際グロボワもリヴィエールも休暇を利用して日本に旅行していた。こうして上海は、パリ～上海～長崎、神戸、大阪、京都、東京などを結ぶ文化ネットワークの結節点となった。

フランス語新聞における日本紹介も、初期から盛んだった。温泉地やスキーの名所や各地の風景から、芥川龍之介の小説翻訳、能劇や宝塚を含む文化芸術の記事は豊富で、質も高かった。そもそも日清戦争から始まった日本の上海進出と、共同租界の北側に広まった日本人居留民社会の存在は、西洋人居留民にとっても無視できない存在だった。満州事変や上海事変を起こした日本に対して、フランス国内の世論と一致して、『法文上海日報』の姿勢もほぼ批判的だった。満州事変の前に発表した「グロボワ中国報告」の結尾にも、「中国にいるヨーロッパ人は

中国のために、危険な万力の歯である日本およびロシア勢力の防御壁でなければなりません」(28頁)というくだりが見られる。しかしこうした政治的な批判は、彼の日本文化への評価を妨げていない。グロボワはかつて自身の音楽評論の中で、上海工部局楽団と共演した山田耕筰(1886-1965)を賞賛し、アリアンス・フランセーズの図書館に、日本文化に関するコレクションを作ることも提案した。彼はのちに日本文化を紹介する書物をいくつも出版したが、その関心は上海時代から始まったに違いない。

ただ上海にいる日本人居留民は、一般に虹口地区の日本人街に集まり、ガーデンプリッジを渡って「河向こう」の共同租界に行くことが少ない。フランス租界に居を構えるのも、ごく少数のエリートだった。従って鲁迅と内山完造を介して盛んに行われていた日中文化人の交流と比較して、上海のフランス界と日本文化界の間には、人的な交流は乏しかったのも自然である。それでも途絶えたわけではなかった。まず本論の冒頭でも挙げたように、日仏と中仏のそれぞれの文化交流の組織が、両方を結ぶツールとなった。

遡ると、中国のフランス留学が最も盛んだった1919年に、フランス政府は既に大学使節団を日本に送り、日仏交流の「場」を設立する計画を打診したが、そのメンバーはリヨン大学総長ジュバン(Paul Joubin)と漢学者で文学部教授のクーラン(Maurice Courant, 1865-1935)だった。二人こそが「里昂中法大学」の設立に関わった貢献者だった。教務主任も務めたクーランは大学の実質的な責任者であり、一期生で文学博士号を取得し、数多くの中国文学をフランス語で紹介した徐仲年(または徐頌年, Sung-nien Hsu, 1904-1981)の恩師でもあった。中国伝統音楽の専門家であるが、日本語にも通じている。そして彼らが目指した日仏交流の場、すなわち東京日仏会館と関西日仏学館の設立は、数年後長らく中国で外交官を務めていた詩人大使ポール・クロードルによって実現された。一方、クロードルの努力が、またグロボワの「中法聯誼会」創設に何らかの影響を与えていたとしても不思議ではない。もっとも『法文上海日報』にはクロードルの作品が頻繁に掲載されているし、東京日仏会館の記録からも、戦前この新聞が購読されていたことが確認できたのである。

こうした組織があったため、人員の相互流動も多くみられる。1933年だけを見ても、3月に著名なシナ学者ポール・ペリオ、10月にフランス上院議員と前文相で、パリ日仏協会会長のオノラ(André Honnorat)などが中国から日本、または日本から中国へ訪問したことは、上海のフランス語新聞と中国語新聞、さらには『日仏文化』の「日仏会館消息」からも確認できる<sup>16)</sup>。当時としてはこのようなルートでの移動はごく自然に行われ、極東を訪問した世界的に著名な文化人のほとんどが中国と日本の両方を訪問している。

ところで、グローバルな文化交流と絢爛多彩な「海派文化」の発展は、日本の侵略によって断ち切られた。1937年7月、日中全面戦争が勃発し、上海は3ヶ月にわたる中国軍の激しい抵抗の後、日本軍に占領され、租界は「孤島」となった。さらに太平洋戦争の勃発によって共同



租界も日本軍に進駐され、日本管理下の *The Shanghai Evening Post and Mercury*（『大美晩報』）を除いて、主な英字新聞がほぼ停刊し、『申報』や『大陸新報』も日本の支配下に置かれた。日本人居留民も急増して、その数は10万人に達した。一方、日本とヴィシー政権との良好な関係によってフランス租界は協力を一部強いられたものの、占領はされなかった。『法文上海日報』も停刊を免れ、西側のメディアとして交戦国以外の視点を提供し続け、日本関連の記事も一気に増大した。それに大きく寄与したのは、駐リヨン領事の父とリヨン女性の母を持つキク・ヤマタ（Kikou Yamata, 1897-1975）だった。その経歴については、矢島翠『ラ・ジャポネーズ キク・ヤマタの一生』（1983年、潮出版社）に詳しいが、ヤマタはパリで活躍していた中国の文学者盛成（1899-1996）とも交流があり、徐仲年ともパリの文化サロンを通して面識があったことはあまり知られていない。彼女が満州事変後日中間の恋愛物語 *Mille coeurs en Chine* を書いたことも、こうした体験と関係しているのだろう。1942年前後にヤマタは歌舞伎、生け花、美術、文学、アイヌ民族など、日本の文化や事情を紹介する記事を『法文上海日報』に寄稿し、その数は十数点に上った。

1943年7月、日本政府はフランス租界を汪兆銘政権に「返還」し、実質租界全体を統治下に置いた。フランス語新聞は日曜特集を中止し、1944年4月より紙面も大幅に縮小し、印刷の質も劣悪になった。しかしこの縮小版の所蔵先は、寡聞の限り、京都大学図書館のみである。現在の所蔵分は1942年4月から1944年11月までのものであり、紙面には「京都帝国大学文学部教官室備付雑誌」と印字され、受け取った日付は「昭和十七年四月二十三日」から始まる。京都帝国大学もかつてこの新聞を購読したことが裏付けられた。

#### 4 グロボワと関西日仏学館

##### 1) 上海から京都へ

二度の上海事変による戦禍と日本の支配は、当然フランス人居留民の生活も暗転させた。グロボワの中国の友人も、抗日組と協力組に分けられてしまう。徐仲年と林風眠が勤め先と共に重慶に移住したが、汪兆銘の腹心である褚民誼は南京政府の行政院副院長兼外交部部長に任命され、駐日大使も務めた。「中法聯誼会」の理事でもあった褚民誼は、のちに「中日文化協会」を提案、発足させ、自ら理事長も務めたが、彼が作りあげた協会の規則とその運営においては、「中法聯誼会」からの影響が濃厚だったと思われる。かつて経験していた和気藹々とした中仏間の文化交流を、日本との間にも再現させようと思ったのだろうか。その期待が見事に外れたのは歴史の皮肉としか言いようがない。

ところで公董局がヴィシー政権へ転向したものの、グロボワは仲間と上海「自由フランス」を設立し、フランスの抵抗運動を支援した。戦後はフランス語新聞の後続紙の創刊に参与し、

執筆活動も続ける一方、1946年よりフランス大使館文化参事官として、外交活動にも参与した。国共両党が再び内戦に突入し、蒋介石政権に多大な期待を示していたグロボワは、やがて失望し、自著『新しい民主主義の中国』(*La Chine en nouvelle démocratie*, 1954)というタイトルに象徴されているように、新しい中国に期待を寄せるようになった。戦時下および内戦期におけるグロボワの活動について、拙稿「上海から京都へ——「高博愛」(Charles Grosbois)の戦後」(高網博文ほか編『上海の戦後——人びとの模索・移動・記憶』, 東京: 勉誠出版, 2019年8月)を参照されたいが、多くの外国人居留民が中国を離れるなか、グロボワは上海に残り、新しい中国の建設に関わろうとした。しかしその熱意も虚しく、中法聯誼会は1950年に解散し、翌年11月に会所も閉鎖された。グロボワも30年以上住み続けた上海を去った。しかし彼の行く先は、祖国のフランスでなく、日本の京都だった。

上海から離れたグロボワは、朝鮮半島への訪問とユネスコでの短期勤務を経て、1953年10月より関西日仏学館の館長に着任した。6年間にわたる彼の活動については、まだ調査中で不明なところが多かったが、学館の歴史を調査している立木康介教授が率いる研究班から全面的な協力をいただいて、いくつかの事実関係が明らかになった。さらに本稿を執筆している最中、立木教授のご好意で、研究班が入手した史料である、グロボワが書いた「フランスの観点から見る京都とその近辺における文化事情に関する覚書(1953年11月-1954年4月)」(*Notes sur la situation culturelle de Kyoto et de sa région du point de vue français, période: Novembre 1953-avril 1954*, フランス外交史料館所蔵)を読むこともできた。1953年10月に到着してまだ半年しか経たなかったグロボワは、学館の日仏両国のスタッフの助力もあって、京都、大阪、神戸、奈良のみならず、広島、九州、名古屋に至るまでの文化事情とフランス語教育の現状について、詳細なデータと付録を加えて報告した。そのうえ、就任した当時の学館の様子や、実施してきた改革の数々も詳細に記録した。100ページを超えるこのノートは、そもそも学館の再建に必要な資金と物質、および人員の増強を求めるときの報告書であり、戦後間もなかった日本のフランス語の教育と文化事情を、グロボワの視点から見ることができるうえ、学館とグロボワの動向を知る絶好の史料でもある。紙幅の制限とセミナーの報告という拙稿の趣旨もあって、このノートについての詳しい検証は今後にするが、ここではひとまず上海と関連性の強い部分を、数点のみとりあげたい。

まずグロボワは日仏の経済関係と政治関係から、日本の教育、文化(音楽、美術、映画、演劇など)、メディアや出版の事情、そして在日外国人のコミュニティーの文化活動と特徴に至るまで、実に幅広く調査している。中でも専門家としてとりわけ音楽と教育において最も多くの紙幅を割いている。半年の間にこれほど内容の深い調査を遂げたことから、彼が日本という国を深く知ろうとする意欲が読み取れる。学館の創設に尽力した稲畑勝太郎とその友人たちの名と功績を繰り返し、ジャン=ピエール・オーシュコルヌを始めとするスタッフに対しても、

一人一人名前を出してその仕事ぶりを高く評価している。上海で鍛えられたリーダーとしての手腕と観察力はここでも健在だった。

ただ上海の豪華な校舎と住宅に比べて、関西日仏学館の建物は質素だった。かつては「世界にフランスが占める座」の例証として建てられた関西日仏学館は、戦争が終わるまでの最後の数ヶ月の間に、軍用精密機器の工場とされ、美しい装飾品や調度品の数々も略奪の憂き目に遭った<sup>17)</sup>。その爪痕は8年経ってもなお残っている。グロボワは就任した当初、建物の半分がまだ整理されず、いくつかの教室が物置とされたままであり、トイレの下水も壊れて悪臭が漂っていると嘆いた（57頁）。建物だけでなく、戦争によって荒廃した日本の教育事情に対しても、彼の評価は厳しかった。日本人学生の一般教養の低さ、とりわけ西洋の科学知識から文学、歴史、哲学、さらには母国語の学力に至るまでの貧弱さには驚いている。大正時代の教養主義を自ら放棄し、欧米諸国との対立と戦争によって多くの若者がまともな教育を受けられなかった現状、及び反米からアメリカ一辺倒に走る有様を、グロボワは辛口で批判した。ただ「ある文学専攻（日本語ではないが）の大学卒業生が知っていた漢字の数（日本語の常用漢字は1800から1900字で、多くて2500字だが）は、3000から4500字まで使える中国人の中学二年生よりも少ない」という、彼の日本語に対する認識の浅さには思わず莞然とする。

## 2) 学館のフランス語教育について

グロボワはまた日本の外国語教育が、「生きた言語」を教えるものではなく、授業内容はまるで「耳や言葉が不自由な人向けの、見ているだけで単細胞のものだった」と酷評している。その「世界においてもユニークな試み」の理由を、彼は一旦視覚的な漢字学習から求めようとしたが、しかし「この現象は中国には見られなかった」と躊躇う。すなわち、もしかして日本には言語的な「面子」を保つ必要があるのかもしれないが、しかしそれに対して中国人は、同様に傷つきやすい羞恥心や自尊心があるにもかかわらず、恥ずかしげもなく笑いながら、途方もないちんぷんかんぷんの外国語に飛び込んでいくことができるからだ。結局日本と中国における外国語教育の大きな差異の理由は分からないまま、グロボワは日本にはまるで「外国語を学ぶのは、読解と翻訳のためであり、話すと書くためのものではない」という「独断」のようなものが定着していると感じた。そしてフランス語の教員たちはこの偏見を口先で非難しても逆らおうとしないし、ある英語教授に至っては五ヶ月経っても、学生から一言も引き出すことができず、代わりに日本人の英語教員たちに実用会話を教えることが求められたというエピソードも語ったのである（16-17頁）。

「面子」を重んじる中国人の学生を語るグロボワの中国報告を想起すれば、非常に興味深く、グロボワ流のアイロニーだが、日本で20年以上中国語を教えてきた筆者も、常に話すことを拒む学生には手を焼いている。ただその理由は、グロボワが発見した「面子」云々よりも、単

純に日本の言語は単一ではないものの、ヨーロッパや中国に比べて多様性に欠けていることにはあったのではないと思われる。すなわち多文化、多言語の環境に揉まれて育った人にとっては、言葉が通じないことは日常茶飯事であり、片言でもコミュニケーションを取らなければならないため、それを恥じる人も少ないのだろう。対して日本では異文化を受け取る必要性があったとしても、「異人」と交流する必要に迫られるケースがそもそも限られている。ただフランス文化を伝えるだけでなく、フランス語の教育そのものも自らの使命にしたグロボワは、それを許すことができなかった。

敏腕な教育家であるだけに、彼は早速様々な改革案を打ち出した。各クラスの授業内容を決め、教員にはより多くの課題とドリルを学生に課すことを要求した。自らも幾つものクラスを受け持ち、また上級クラスには2時間ずつのフランス哲学史や芸術史を分かりやすく講じることにし、好評を得た。京都と周辺の大学や教育機構にも頻繁に出向き、教員たちと交流し、受講者数を増やそうと手を尽くした。その努力が功を奏し、一般の大学生に加わり、修士や博士課程の受講生も増えたという。かつてソルボンヌで古典文学を学び、高い素養を有したグロボワだからこそ、日常会話程度のフランス語教育では物足りず、より高いレベルの教育を望んだに違いない。

また上海の時と同様に、彼は図書館の充実も重視している。早速学館の図書館に残っている6000冊の書籍を点検し、文学類がそれなりにあるとはいえ、哲学、社会学、歴史のセクションは脆弱であり、法学や医学、科学技術類が古くなっていたと書いている。その補足分として、上海アリアンス・フランセーズからは15000冊もの書籍がグロボワの着任直前に日本に運ばれ、関西日仏学館に届いたのである。これらの書籍が日本に移送された経緯についてはまだ調査中だが、グロボワの京都行きとの因果関係は十分考えられる。そしてグロボワの斡旋により、これらの書籍は関西日仏学館だけでなく、のちに東京の日仏会館と1952年建設されたばかりの日仏学院（現在のアンスティチュ・フランセ東京）にも送られたのである。前述したように、2万冊以上のフランス語の書籍を有する上海アリアンス・フランセーズ図書館は、共同租界の図書館と並んで、極東最大の外国語の蔵書量を誇っていた。図書館に納品する全ての書籍に番号が振られており、そのリストはフランス語の新聞にも掲載されていた。関西日仏学館の蔵書には「NO.2」と印字されているバルザックの小説も含まれている。長年積み上げてきた財産のほとんどを失ったフランス人が、祖国の文学や歴史関連の書籍を何よりも大事にしたその行動に、思わず心を打たれた。そして日本へ運ばれたこれらの書籍は、資源が極端に不足していた当時のフランス文化界にとっても、まさに恵の泉と言えよう。戦前からすでに始まったこれらの書籍の往来は、日仏中の文化交流の重要な証であり、今後さらなる調査が必要である。

### 3) グロボワが推し進めた日仏文化交流

グロボワがもう一つ力を入れたのは、学館のイベントだった。前館長たちもアメリカ占領下の厳しい時期にフランス語教室を再開し、フランス映画の上映や講演会とコンサートの催しを行い、かつての活気を取り戻そうと努力した。グロボワは活動の頻度と質をさらに上げ、「学館はただ閉まっている美しい建物ではなくなり、常に開かれており、人々はそこに訪ねてくる」（79頁）と誇った。そして水曜日を催しの日と定め、「もし学館の毎週の水曜日が京都の生活に溶け込む日が来れば、私たちは重要な一步を踏み出すだろう」と期待を込めて述べている。しかもただ講演の場数をこなすことに満足せず、フランス語の講演や映画の上映に際しては、内容を事前に日本語に訳させて配布し、当日も通訳を手配する。コンサートに至っては、白系ロシア人でピアニストの夫人と共に登場しただけでなく、曲に関する解説も日本語訳付きで披露した。戦争で右手を失ったにも関わらず、グロボワは義肢で弓を引くバイオリン奏者でもあったのだ。上海で長年音楽評論を書き続け、時折出演もしていたグロボワは、このような機会に飢えていたに違いない。

上海にいた時と同様に、グロボワは学館外のイベントにも積極的に参加し、京都のフランス映画観賞会ではゾラの映画を解説し、各種の食事会や集まりにも頻繁に出席した。1954年3月26日（木）に関西フランス言語学会の成立大会が行われ、京都や大阪から60人の教授たちが集まった。「日本語で」フランス文学や日本のフランス語教育について報告した日本人教授に続いて、グロボワは「何によりもまず音楽について」（*De la Musique avant toute chose*）というタイトルのもとに、ヴェルレーヌの詩について講演した。これらの活動の数々は、今後学館の報告書や日本の新聞雑誌、または参加者の回想を精査すれば、その詳細がより明らかになるだろう。すでに戦後の関西で上演されたオペラやバレエの数々に上海とのつながりが証明されたように<sup>18)</sup>、上海を結節点にした仏・中・日間の文化交流は、繁栄期の戦前から戦後まで、脈々と続いたのである。そのなかでグロボワが果たした役割は、このノートからも一部確認ができ、今後さらなる進展が期待される。

なお吉田に新しい学館が建設された経緯については、1986-1994年の期間館長であったミッシェル・ワッセルマン氏の報告（注17所掲）に詳しいが、立木研究班の調査によって、1959年学館の土地買収をフランス政府へ提案して実現させたのも、グロボワであったことが判明している。このノートのなかでも、グロボワはすでに土地の所有関係に目をつけ、建設当初の関連文書を見つけて付録として添付した。すなわち彼は1954年の時点ですでに土地買収の件を考案していたのかもしれない。この行動も、上海の中法聯誼会の会所作りから生まれたのだろう。

ただ考えてみれば、グロボワは熱心に東西文化の交流を推し進めたとはいえ、フランス租界をバックにかなり特権的な生活を上海で過ごしてきた。それに慣れた彼は、フランスには主権喪失

をしなかった日本での立場との差異を、果たして認識できただろうか？ある程度対等な関係で付き合っていた京都の日仏関係者にとって、よそ者でありながら、鋭い指摘を下したり、時には高飛車的な態度を見せたりしたグロボワは、反発を呼びやすい人物だったかもしれない。前任者のロベール館長が「控えめに」(timidement) 予算の増額を要求しているのに対して、20項目もわたる要求リストを一気に提出してしまうグロボワは、上司にとっても厄介な存在だったに違いない。京都での6年間の活動の詳細についての調査は今後の課題になるが、しかし前稿「上海から京都へ——「高博愛」(Charles Grosbois)の戦後」にも取り上げた、京都を離れる前に彼が受けたインタビューや、かつての教え子で、のちに京都大学の名誉教授となった中川久定氏(1931-2017)の回想からも、日本の学生や京都の人々に対する深い愛情が読み取れる。特に中川氏の記録をグロボワのノートと対照してみると、館長であると同時に教師でもあったグロボワ像は一層鮮明に浮かび上がってくる。

大学院修士課程の学生であった私は、関西日仏学館で、館長グロボワ先生から週一回、午前中の授業を受けていた。毎回書き取りがあり、厳しく採点されているうちに、最後に残った受講生は私ひとりになった。それから学期の終わるまでの一か月間、土曜、日曜を除き毎朝、私だけに三時間の演習が行われた。狭い教室で、辞書『リトレ・エ・ボージャン』だけを与えられ、課題論文を書かされるのである。その題を一つあげるとすれば、「事実(fait)とは何か」であった。翌朝には答案が返されたが、いたるところに真っ赤な斜線が引かれていた。(中略)私はその後、東京日仏学院でフランス政府給費留学生選抜試験を受けようとしていた。その私のために、グロボワ先生が書いてくださった推薦文の中には、次の言葉があった。——中川は、「精神の独創的な形(une forme d'esprit originale)」を備えている青年である。それ故、彼を「特に強く(tout particulièrement)」推薦する、と。私は28歳であった。(中川久定「わたしの近況(2012年夏)28歳から81歳まで」[http://bunkyoken.kawai-juku.ac.jp/researcher/post\\_78.html](http://bunkyoken.kawai-juku.ac.jp/researcher/post_78.html))

一方、インタビューでは、グロボワは日本の若者は勤勉だが、勇気がやや足りないと指摘し、今後は専門知識に囚われず、広い視野と素養を持つよう努力すべきだと期待を込めて話した。1931年休暇を利用して日本を周遊した時にすでに京都と奈良に魅了されたグロボワは、京都の街と建築に心酔し、こたつと風呂、刺身とそばにも慣れて、京都の市民と一緒に映画館に座る時は、まるで家族と一緒にだったような感じさえしたと述べている<sup>19)</sup>。1958年、京都がパリと姉妹都市を締結した際、パリ市の代表として祝賀式典でスピーチを行ったのもグロボワだった(図4)。

1959年フランスに帰国するまで、グロボワは実に40年もの長い年月を極東の地で過ごした。

彼は1972年フランスでその生涯を閉じたが、『徒然草』と『方丈記』の翻訳（共訳）や、浮世絵の春画研究を含む日本文学・文化関係の著作も多数刊行している<sup>20)</sup>（図5）。



図4 グロボワが京都・パリの友情盟約宣言文の伝達式に出席した場面。『京都新聞』昭和33年（1958）6月14日（土）夕刊

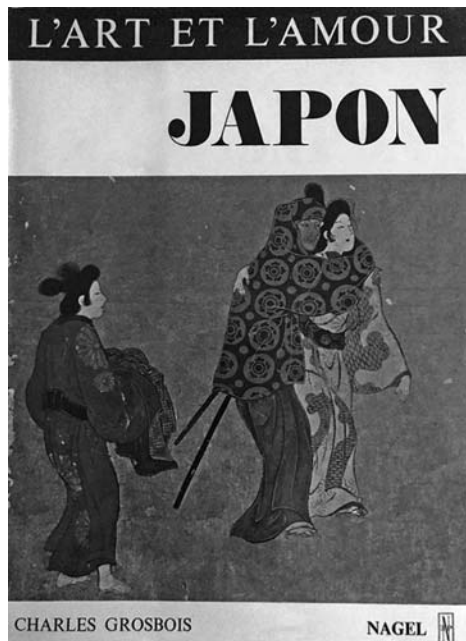


図5 浮世絵春画を紹介するグロボワの著作

## 結 び

租界の存在は、中国にとって主権喪失を意味しており、ミッション系学校を含む文化事業の数々も、かつて「帝国主義による文化侵略」の証として完全に否定された。フランス租界を有した上海は、「東洋のパリ」という異名を持ちながらも、数多くのダンスホールや、妓楼、阿片館に渦巻く犯罪と淫乱の都市、すなわち「魔都」のイメージがより際立っている。対して日本の上海史研究は歴史が長く、成果も豊富だが、日本人居留民への関心に重心が置かれていた。21世紀に入ってから世界においては、欧米人居留民の生活や芸術活動に注目する研究が増え、大きな成果も得ている。ただフランス語資料を使うフランス租界研究はまだ僅少であり、多くの資料は長年各国の図書館や公文書館に「死蔵」されている。グロボワのような重要人物でさえも、今や上海史研究の専門家すらその名を知るものは殆どいない。しかしすでに見てきた通り、20世紀前半という世界が激変した時代に、国際都市上海におけるフランス租界の重要性

は自明であり、また文化交流を研究する際、「日仏」「中仏」のような二カ国間の研究では見えてこないものも多々ある。グロボワの日本での活動に辿り着くことができたのも、web サイトから得た情報をもとに、アンステイチュ・フランセ関西に連絡した筆者に、館史の調査をしている長谷川さと子氏が立木康介教授を紹介して下さった結果だった。そして部外者の私に、立木教授は京都大学のセミナーでの報告と論文発表の機会を提供して下さっただけでなく、研究班が長年調査を重ねて入手した貴重な一次史料も全て自由に閲覧させて下さった。また研究班のメンバーで私の研究協力者になって下さった藤野志織氏のきめ細かい助言のお陰で、私も井口淳子氏と共にフランス外交史料館に向向き、上海フランス租界に関する大量の一次史料を短時間で「発見」かつ入手することができた。そしてこれらの史料を解読するための新たな共同研究も開始したのである。このような経験からも、未知の部分がまだ多かった上海フランス租界の研究に、今後より多くの関心と、専門家の参入を切に望んでいる。

付 記

本論は科学研究費助成金基盤研究 (C) 「『仏文上海日報』(1927-1945) を巡る日・仏・中の文化交流」(代表: 趙怡) および科学研究費助成金基盤研究 (B) 「上海フランス租界を結節点とする日仏中三か国の文化交流史」(代表, 榎本泰子) の研究成果の一部である。なお資料調査と論文作成にあたり、多くの協力とご教示をくださった長谷川さと子氏, 藤野志織氏, ミッシェル・ワッセルマン氏, 井口淳子氏, 野澤丈二氏に感謝を表したい。とりわけセミナーでの報告と論文発表の機会と共に、貴重な一次史料を惜しみなく提供して下さった立木康介教授に衷心より感謝申し上げたい。

註

- 1) ルイ・マルシャン著, 宮本正清訳「関西日仏学館新館: 日仏文化交渉文獻」(京都: 日仏文化協会, 1937年12月)を参照。なおクロードと日仏文化交流については, アルバム・クロード編集委員会編『詩人大使ポール・クロードと日本』(水声社, 2018年), Michel Wasserman, *Les Arches d'or de Paul Claudel*, Paris: Honoré Champion, 2020などを参照されたい。
- 2) グロボワの生い立ちについては, 上海档案館所蔵外国籍職員登記簿(1943, U38-1-1457), フランス外交史料館(Nantes)所蔵フランス学校の職員名簿(635PO/A/128), Guy Brossollet, *Les Français de Shanghai, 1849-1949*, Paris, Belin, 1999などを参照。
- 3) フランス租界史については, 主に上海租界志編纂委員会編『上海租界志』(上海社会科学院出版社, 2001年), Charles B Maybon, Jean Fredet, *Histoire de la concession française de Changhai*, Edité par Plon, Paris, 1929の中国語版『上海法租界史』(倪静蘭訳), 上海社会科学院出版社, 2007年, Guy Brossollet, *Les Français de Shanghai, 1849-1949*などを参照。
- 4) 「上海華法教育会公啓」, 張允侯等編『留法勤工儉学運動』1(上海人民出版社, 1980年), 88-



- 89 頁、「発起上海華法教育会」、『申報』1919 年 8 月 9 日などを参照。
- 5) 「付録 洪誠貪汚案」, 張允侯等編『留法勤工儉学運動』2 (上海人民出版社, 1986 年), 470-481 頁などを参照。
  - 6) これらの記事が数多く掲載されており, 一部だけ例をあげると, 「欲送赴法学生紀」『申報』1919 年 7 月 7 日, 「環球学生会欲送赴法学生」『申報』1919 年 9 月 29 日, 「留法儉学生出發記」『時報』1919 年 12 月 10 日などがある。なお前掲張允侯等編『留法勤工儉学運動』1 にも多く含まれている。
  - 7) 葛夫平『中法教育合作事業研究 (1912-1949)』(上海書店出版社, 2011 年)などを参照。
  - 8) Ch. Grosbois, *La Langue Française en Chine et le Rôle de l'Alliance Française*, フランス外交史料館ナント館所蔵 (635PO/A/172)。日本語訳は藤野志織氏の翻訳によるが, 筆者自身が訳し直した箇所がある。なお以下この報告からの引用は原文のページ数のみを明記し, 注を省略する。
  - 9) 胡祖蔭「学校調査 上海法国学校概況 (一)」, 『申報』1936 年 3 月 31 日。
  - 10) 『申報』1929 年 3 月 9 日, 筆者訳。「梅雲鵬」はすなわちシャルル・メボンであり, 1920 年公董局学校校長より「中法工商学院」(＝中法国立工業専門学校)校長に転任した。
  - 11) *Le banquet du directeur de l'Institut, Le Journal de Shanghai*, 1929. 5. 25. p. 6. 筆者訳, 以下同。
  - 12) 現時点で知られている所蔵状況は以下の通りである。① フランス国立図書館 (BnF) (1928 年 1 月-1940 年 5 月。ほぼ欠落なし)。2012 年筆者が参加していた「ライシャム劇場研究班」(代表, 大橋毅彦)の要望に応じて, BnF は日本の科研費も利用して所蔵分をデジタル化して, 現在ホームページ上で公開している。② 上海図書館徐家匯蔵書楼 (1927 年 12 月-1944 年 3 月。欠落部分あり。デジタル化が進められている)。③ 京都大学文学研究科図書館 (1942 年 4 月-1944 年 11 月。欠落部分あり)。
  - 13) この新聞については拙稿「研究上海法租界史不可欠の史料宝庫——《法文上海日報》(*Le Journal de Shanghai*, 1927-1945)」(馬軍・蔣傑編『上海法租界史研究』第 2 輯, 2017 年 12 月)を参照されたい。
  - 14) グロボワの音楽活動については, 大橋毅彦・趙怡ほか編『上海租界と蘭心大戲院』(上海人民出版社), 大橋毅彦ほか編『上海租界の劇場文化』(勉誠出版) (共に 2015 年), 井口淳子『亡命者たちの上海楽壇: 租界の音楽とバレエ』(音楽之友社, 2019 年)などを参照されたい。
  - 15) クロード・リヴィエールの生い立ちについては, Claude Rivière, *En Chine avec Teilhard*, Editions du Seuil 1968.; Guy Brossollet, *Les Français de Shanghai, 1849-1949*; F. Ch. Morant, *Dans les mers du Sud: un entretien avec Mme. Claude Rivière, Le Journal de Shanghai*, 1935. 5. 26, p. 5, p. 10, p. 11 などを参照。なおリヴィエールの本名と生没年については, 菅野賢治氏のご教示による。
  - 16) 「日仏会館消息」『日仏文化』新第 3 輯, 1933 年 3 月, 211 頁, 同新第 5 輯, 1933 年 12 月, 170 頁などを参照。
  - 17) ミッシェル・ワッセルマン, 立木康介『京<sup>みやこ</sup>にフランスあり! アンステイチュ・フランセ関西(関西日仏学館)の草創期』(京都大学人文科学研究所, アンステイチュ・フランセ関西, 2019 年 3 月)を参照。
  - 18) 前掲井口『亡命者たちの楽壇——租界の音楽とバレエ』などを参照されたい。
  - 19) 「今週登壇 関西日仏学館長シャルル・グロボワ氏: 京都のパリの留学生交換 ぜび軌道にのせてほしい」, 所載紙不明。アンステイチュ・フランセ関西長谷川さと子氏提供。
  - 20) Ch. Grosbois, *Shunga, images du printemps, essai sur les représentations érotiques dans l'art japonais*, Genève, Paris, Munich: Nagel, 1964. (*L'art et L'amour, Japon*, Les editions Nagel, 1976.)

## 要旨

関西日仏学館 (Institut franco-japonais du Kansai) は 1927 年設立当初から上海に注目され、現地のフランス語新聞 *Le Journal de Shanghai* (1927-1945) にも度々紹介された。とりわけ 1936 年 5 月、学館が京都市内に移転された際は、多くの写真を含む特集記事が紙面 4 ページにわたり掲載された (1936 年 6 月 14 日)。翌年には東京日仏会館についての特集も見られる (1937 年 1 月 17 日)。これらの日仏文化交流の場を上海と繋げたのは、すなわち上海フランス租界の存在であった。そして 30 年以上も租界の教育文化界を牽引したシャルル・グロボワ (Charles Grosbois, 1893-1972, 中国名は「高博愛」) は、戦後日本に渡り、関西日仏学館館長を務めたことも、偶然ではない出来事だったと思われる。

ソルボンヌで古典文学を学び、第一次世界大戦に参戦して重傷を負い、右手を失ったグロボワは、1918 年頃上海に渡り、フランス租界公董局所属校の校長や公董局教育処の処長などを長年務めた。同時に中国のフランス留学運動にも関わり、またアリアンス・フランセーズの中国総代表として、フランス語教育と中仏間の文化交流に尽力した。1953 年から 1959 年帰国するまでは関西日仏学館館長として、戦争で荒廃していた関西のフランス語教育の復興と、日仏間の文化交流にも貢献した。しかし今となっては上海史研究の専門家さえ、その名を知る者はほとんどいない。

本論は長らく歴史に埋もれた上述の事実を、仏・中・日三ヶ国の一次資料に基づいて明らかにする試みである。それと同時にかつてはフランス～上海～京都を巡る文化交流のネットワークが存在していた事実を浮き彫りにしたい。

キーワード：シャルル・グロボワ、上海、フランス租界、関西日仏学館、文化交流

## Abstract

Charles Grosbois (1893-1972) used to be a key person both of the French Concession in Shanghai and the Institut franco-japonais du Kansai. A Sorbonne graduate in classical literature, he went to war and lost his right hand. In 1918, he came to Shanghai as a professor of the French School, and was later appointed the director of the school and the general representative of Alliance Française in China, which soon let him join the movement of Going to France for Work-&-Study Program (留法勤工儉学運動).

From 1933 to 1943 Grosbois also worked as the director of the Education Department of the French Concession, where he greatly contributed to promoting French education and cultural exchanges. He left China in 1951, then came to Kyoto in 1953 to become the director of the Institut franco-japonais du Kansai, where he again did his best to promote French education and cultural exchanges. Earning the Chinese name of “高博愛” (Gao bo'ai) — 高 (Gao) is a very common family name in China, and the first name 博愛 (bo'ai) means fraternity — Ch. Grosbois devoted over 40 years of his life to Chinese and Japanese people. Nowadays however, even Shanghai history scholars know little about him.

Based on French, Chinese and Japanese historical documents, this article will describe Grosbois's contribution in detail, and shed light on the functioning of a cultural network between Paris, Shanghai, and Kyoto during the first half of the 20th century.

**Keywords:** Charles Grosbois, Shanghai, French Concession, Institut franco-japonais du Kansai, cultural exchanges